２０２４年度　入学試験問題

２月１日　第１回　午前

国　語（４５分）

注 意

１．はじめのチャイムがなるまで問題用紙には手をふれないでください。
２．問題は２から14ページまでです。
３．解答用紙には氏名でなく、受験番号を書いてください。
４．机の上にあるQRコードのシール（どれでも良い）を解答用紙右上の「ここにシールをはってください」のわくの中にはってください。
５．解答はすべて解答用紙に書いてください。
６．おわりのチャイムがなりはじめたら、書くのをやめて、えんぴつをおいてください。
７．句読点・記号も字数に数えます。
８．本文は出題の都合上、一部変更しています。

三輪田学園中学校

一　――1～10のカタカナの部分を漢字に直しなさい。
また、――11～15の読み方をひらがなで答えなさい。
つづけ字ではなく、一点一画をていねいに書くこと。

1　暴風雨はしばらくショウコウ状態だった。
2　ラジオのデンチを取りかえる。
3　多くのモンテイをかかえる師匠。
4　バクガ飲料を買う。
5　行動のキジュンを設ける。
6　フショクフを用いたマスク。
7　将来をヒカンするのはやめましょう。
8　イサみアシだったと反省している。
9　人生のキロに立つ。
10　災害に備えて対策をネる。
11　人事を刷新する。
12　市井の人として暮らす。
13　子どもの生い立ちを見守る。
14　干潟に遊ぶ鳥。
15　株式の仲買人。

二　次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

米山綾瀬は、友だちをつくるのも人付き合いも苦手。中学に入学すると、ただひとりの小学校時代の親しい友だち結城志麻とはクラスが分かれてしまった。失敗を恐れて課外活動の部活には入らなかった。必修クラブを選ぶ時も、ジャンケンに参加したくないという理由で人気のない「創作文クラブ」を選んだ。初めてのクラブの時間に、顧問の番場先生から一学期の間に原稿用紙五枚の作品を創作するように言われる。隣に座った片岡泉は、同じ中学一年生ながら、気さくでくったくなく綾瀬に話しかけてくる。

二日一道高　三年生男子。創作文クラブ部長を任される。
森内公利　二年生男子。同じく副部長を任される。
二年B組ガールズ　二年生女子。森内のファンらしい。

土曜日の午前中。家でテレビを見ている。

（中略）

午前中にやっちゃいなさいよ、とお母さんに言われていた宿題はもうやった。半分は昨日のうちにやっておいたのだ。
いつもそういうのは先にやってしまう。残しておくと、どうも落ちつかない。
だから、夏休みの宿題を八月三十一日にやる人のことを不思議に思う。やっておけばいいじゃない、と言いたくなる。ずっと何してたの？　と訊きたくなる。
1片岡さんがまさにそれだというので、実際に訊いてみた。
「うーん。漫画読んだり遊んだりしてんのかな」と片岡さんは答えた。
「ずっとではないでしょ？」
「ずっとではないけど。でも、まあ、ずっとみたいなもんか」
逆にこう訊かれた。
「綾瀬は、何で夏休みの宿題を七月とかにできんの？　何で、やんの？」
うまく答えられなかった。考えに考えて、こう答えた。

「そのほうが楽だから」
「わたしも同じだよ。そのほうが楽だから八月の終わりにやんの。追いこまれればやる気になるし、やった感も味わえる。別にそれを味わいたくてそうしてるわけじゃないけど。いつも自然とそうなるよ」
「落ちつかなくない？」
「なくない。八月の終わりまで、宿題のことはまったく考えないから」
そういう人もいるのだ。2うらやましい。かどうか、よくわからない。
まあ、それはともかく。
テレビを見ている。バラエティ番組だ。タレントさんが町歩きをする、みたいなそれ。
土曜日の午前中にやる番組だから、まったりした感じだ。ゴールを目指して競走したりはしない。クイズ対決をしたりもしない。ただのんびり歩き、たまにソフトクリームを食べたりするだけ。
実際、タレントさんの男女二人が川辺の道を歩いている。そして川に亀がいるのを見つける。
小川も小川。しかも浅瀬だ。水深は二十センチぐらい。そこに直径五十センチぐらいの石がある。水面から少し出ていて、その部分は陽にさらされている。
結構大きな亀が、その石によじ登ろうとしている。左右の前肢を石にかけ、よいしょ、とやっている。人がプールから上がろうとしているときみたいにだ。石の上で甲羅干しをしたいのだろう。
でも石には絶妙な高さがあり、亀は登れそうで登れない。前肢がプルプルしている感じがテレビの画面越しに伝わってくる。がんばれがんばれ、とこちらも知らず知らずのうちに応援してしまう。
亀も二度三度とがんばる。よいしょよいしょと力を込める。が、四度めにかかると見せて、あきらめる。力を抜いて水にぽちゃんと落ち、スイスイ～ッと泳いでいってしまう。
「お、あきらめた」と男のタレントさんが笑う。
テレビの前のわたしも笑う。
多少はがんばるが、あきらめるときはあっさり。そのあきらめ方がいい。あきらめたらもうすぐに石から離れてしまうその感じもいい。3失敗した現場にはいたくないのだ。
わかるわぁ、と思い、4次いで、こう思う。あ、亀は？
創作文をどうするか。このところずっと考えていたのだ。
第一回の創作文クラブでテーマは何でもいいと言われ、翌週の第二回までにいろいろ考えた。身のまわりのことでいいとも番場先生は言ったので、その線でいくつもりでいた。
その第二回で、番場先生に言った。
「中学で部に入るか迷う女子の話を書きたいです」
まさに身のまわりのこと。自分のことをそのまま書けばいいと思ったのだ。
「それは米山さん自身のこと？」と番場先生に訊かれ、
「はい」と答えた。
「米山さんは今、部に入ってるの？」
「入ってません」
「小説ではどうするつもり？」
「入らない、と思います」
「そこは入らせてもいいんじゃない？」
「え？」
「そっくりそのまま現実の米山さんと同じでなくていいのよ。そこでは入っちゃってもいい。入ってたらどうだったのか。そう考えて書くのもあり。もう少し言えばね、入ったけどやめちゃった、でもいいの。もちろん、入ってみたらすごく楽しかった、だからずっと続けます、でもいい。そのあたりをあれこれ考えて、小説として一番いいと自分が思う形にするの。5それが創作っていうこと。現実をそのまま書いてもいいんだけど、それに囚われる必要はない。そこは自由でいい」
番場先生は、生徒一人一人にそんなアドバイスをした。そのうえで、何を書くかはまだ決めなくていい、もっともっと考えてみましょう、と言った。

わたしも考えてみた。確かに、わたしのことをそのまま書いてもおもしろいはずがない。わたしはおもしろい人でも何でもないのだ。

主人公の女子は部に入る。でもそれだけではおもしろくないから、ただ入るのでなく、部をつくってしまう。入りたい部がなかったので、自分で部をつくり、そこに入るのだ。

それはいいかもしれない。音楽をやりたいのに軽音楽部がないから自分たちでつくってしまう。そういうのはよくある。前向きな感じもする。悪くないだろう。

部は何にするか。文芸部。それなら創作文クラブともつながる。番場先生も喜ぶかもしれない。もしかしたらほめてくれるかもしれない。と、正直、そこまで考えた。

小学校の四年生ぐらいからは6もうずっとそんな感じだ。それこそ夏休みの宿題である作文とか読書感想文とかは特にそう。どう書けば先生が喜ぶか。というか、大人が喜ぶか。いつもそんなことを考えて書いている。そうしたほうが楽なのだ。一般的にいいとされていることを書けばすむ。迷うことがない。

これは言うことでもそう。先生に何か訊かれたり、学級会で意見を求められたりしたときは、一般的にいいとされていることを言う。そこまではっきり意識しているわけでもないが、やはりわたしは先生が評価してくれそうなことを言ってしまう。気に入られたいわけではないが、嫌われたくもないのだ。

創作文の締切は六月十六日。今日がもう五月二十二日。締切まで一ヵ月を切っている。いつも早めに動くわたしとしては、そろそろ書きだしたい。

片岡さんは、六月なんてまだずっと先じゃん、とのんきなことを言っていた。わたしはまだ何も考えてないよ、と。

でも第二回の創作文クラブで、どうするかを番場先生には言わなきゃいけなかった。そこで片岡さんは、推理小説にするつもりです、と言った。それには、わたしや番場先生どころか、二日一部長や森内副部長も驚いた。二年B組ガールズの三人も驚いた。

あとで訊いたら。片岡さんは、何も用意してなかったから思いつきで言っちゃった、のだそうだ。推理小説という言葉は知っていたから言っちゃったらしい。そしてそのあとはまた何も考えていないらしい。夏休みの宿題同様、締切の六月十六日ぎりぎりのところで書きだすつもりなのだ。それはそれですごい。

わたしはもう番場先生にオーケーをもらっている。もらったのは、ゴールデンウィーク明けの創作文クラブでだ。

それからもう十日が経つ。その十日間で、さらにあれこれ考えた。で、考えたことがちょっとマイナスに働いた。この話、本当におもしろいかな、と思ってしまったのだ。7小説としてはつまらないんじゃないかな、と。

音楽をやりたいのに軽音楽部がないから自分たちでつくってしまう。そういうのはよくある。と、わたしは前に思った。

よくある、と言っている時点でダメだろう。オリジナルではないのだ。『吾輩は猫である』のまね、というのともちょっとちがう。形ではなく、題材そのものを借りてしまっている。そこに創作はない。番場先生に訊くまでもない。そのくらいのことはわたしにもわかる。

だから、亀？　何で、亀？

あらためて考えてみた。ゼロから。

身のまわりのことでいいと番場先生は言った。それは裏を返せば、身のまわりのことでなくてもいい、ということでもある。

自分に関することなら作文を書けばいい。部に入ろうかと思いましたがわたしは引っ込み思案なので入りませんでした。そういうことは、夏休みの作文で書けばいい。ここでは小説を書きたい。小説っぽい小説、でもいい。まねっぽくなってもいい。初めてだからそれはしかたない。

だったらどうするか。宮沢賢治ではないが、童話みたいにしたい。どうせなら、亀を主人公にしたい。

そこで何故か王様が頭に浮かんだ。童話→『裸の王様』、という

連想だろう。王様はいい。ふくらませそうな感じがある。
主人公の亀に名前はない。そこは猫の吾輩と同じ。
水と陸はもう知っているから、あとは空を知ってみたいもんだなぁ、と亀は思っている。そこで日ごろ仲がいいツバメに頼んで空を飛ばせてもらう。
でもそこでツバメが鷹に襲われ、亀は落下する。そして王様に拾われ、家来になる。
王様は大きな城で優雅な生活をしている。毎晩パーティーを開き、ワインをガブガブ飲む。そのワインを王様のもとへ運ぶのが亀の仕事になる。ワインが入ったグラスを甲羅に載せて運ぶのだ。
一方で、王様はよその国と戦争もしている。パーティーと戦争。どちらも同じくらい好きなのだ。城の塔の上にある砲台から、大砲の弾をよその国にドンドン撃ちこむ。ワインを飲みながら撃ちこむこともある。
王様が何故戦争をするのか。亀は家来のハンスに訊いてみる。平和にあきてきたから戦争をするんだよ、とハンスは答える。ぼくが生まれるずっと前からそうだったらしい。どの王様も同じ。平和にあきてきたら戦争をして、戦争にあきてきたらやめる。その結果、平和になる。だから今は王様が［8］のを待つしかないよ。
ある夜、亀は塔の上から夜空を眺める。ふう、とため息をつき、思う。亀だから一万年生きるとして、あと何千年もここにいるのはちょっとつらいなぁ。思っているうちに眠ってしまい、ドーン！という凄まじい音で目が覚める。
気がつけば、亀はまた空を飛んでいる。しかも大砲の弾に乗って。どうやら砲身のなかで眠ってしまったらしい。朝になって弾とともに発射されたのだ。
やがて下方に川が見えてくる。亀は弾からスルッと滑り降り、ぽちゃんと川に落ちる。
おしまい。

日曜日から三日をかけて、わたしはその小説を書いた。もう少しかかるかと思ったが、書きだしたら早かった。書いているあいだは夢中になれた。知らないうちに二時間が経っていた。
二日めと三日めは、学校から帰るとすぐに勉強机に向かった。宿題をやるときみたいに、さあ、やろう、と思う必要はなかった。やりたかったから、自然とそこに向かえた。
二日めも三日めも、綾瀬、早くご飯食べて、とお母さんに言われた。三日めは、綾瀬、早くおフロ入って、とも言われた。亀が大砲の弾に乗っている最後の場面だったので、一気に書きたかったのだ。
楽しかった。文芸部をつくりたくなった。でも一人でも書けるな、と思った。
ちょっと綾瀬、何してんの。ほんとに早くおフロ入って。
と 9 お母さんに怒られて入ったそのおフロで、小説のタイトルを決めた。
『空を飛んだカメ』。
亀はカタカナにした。そのほうがやわらかくなる感じがしたから。

六月三十日。期末テスト前。一学期最後の創作文クラブ。
提出から二週間後。今日はほかの人たちの作品を読んだ感想を言い合うことになっている。
10 自分の以外で十三人分。一人原稿用紙五枚として、六十五枚。結構な量だ。といっても、本に当てはめれば四十ページぐらい。
番場先生がそう言っていた。だったら、そんなでもない。
「でも死んだよ」と片岡さんは言った。「一学期だけでもう小説を一生分読んだ」
「一生分は読んでないでしょ」とわたしは返した。「だって、一冊分もないんだから」
11 その片岡さんが何を書いたかと言えば。本当に推理小説を書いた。いや、推理小説というか、探偵小説。主人公は意外にも男性。しかも外国人。名前はトム。わたしも読んだことがある『トム・ソ

ーヤーの冒険』から付けたという。
「最初のクラブのあとにさ、考えてみたのよ。わたし、小説って何読んだことあるかなぁって。そしたら『トム・ソーヤーの冒険』を思いだした。昔ね、おばあちゃんが買ってくれたの。[a]買ってくれたから読んだわけ。読んだことを忘れてたくらいだから内容も全部忘れてたんだけど。どんなだったかなぁってことで、こないだ図書室で借りたの。今回のこれの参考になるんじゃないかと思って。正直に言っちゃえば、どっかパクれるんじゃないかとも思って」
「読んで、どうだった？」
「おもしろかったよ。トムがバカっぽくて好き」
だから探偵の名前もトムにしたのだ。ジャックでもジョンでもよかったが、トム。でも秘書はベッキーではなく、ルーシー。片岡さん曰く。だって、そこまでやっちゃったら完全にパクりじゃん。
と、そんなことはともかく。
そう。秘書がいるのだ。何故か金髪。片岡さん曰く。だって、私立探偵って金髪の秘書とかいそうじゃん。
そして作品で一番すごいのはここ。何と、事件が起こらないのだ。探偵が出てくるからつい探偵小説と言ってしまったが。推理小説ではない。探偵は推理しない。金髪の秘書と二人、事務所で、暇だなぁ、暇ですねぇ、としゃべっているだけ。アメリカ人なのでコーラを飲んだりしているだけ。アメリカ人なのにとんがりコーンを食べたりしているだけ。そのとんがりコーンを二人して指にはめて食べ、何かこうしちゃうよなぁ、しちゃいますねぇ、としゃべったりもするだけ。
で、最後に探偵は言うのだ。原稿用紙五枚じゃ事件は起きないよな。
タイトルは、『トムは冒険しない』。本当にそうなのだ。片岡さんは本当にこれを番場先生に提出した。日常ってこういうことかなぁ、と思って。と言って。
この日のクラブで、番場先生は、予告していたとおり、生徒一人一人に感想を述べさせた。そして印象に残った作品も挙げさせた。

[b]一年生。A組からという順番だった。
A組の塩谷さんとB組の今江さんは、無難に、二日一部長の『ツバメ』を挙げた。
わたしの作品にも出てきたツバメ。でもこちらは現実的。家の軒先にできたツバメの巣を見守る家族の話だ。二日一部長の経験談だという。フンの被害がひどかったので、二日一家では、雛が飛び立つのを待って巣を撤去したそうだ。
「ちょっと後悔したんですよね」と二日一部長は説明した。「そのままにしておけば来年もまた来てくれたんじゃないかと思って。シートを敷くとか、巣の下に木の板を付けるとか。ぼくらにもやりようはあったのかもしれません」
二日一部長。優しいのだ。
この『ツバメ』は[c]よかった。さすが三年生。さすが部長。とわたしも感心した。
A組、B組、と来て、C組。片岡さんの番。
片岡さんなら自作『トムは冒険しない』を挙げたりすることもあるかと思ったが、[d]それはなかった。それ以上に意外なことを言った。
「わたしは綾瀬、じゃなくて米山さんの『空を飛んだカメ』がダントツで一番だと思います。もうムチャクチャおもしろくて、途中でゲラゲラ笑いました。甲羅にワインを載せて運ぶとか、大砲の弾に自分が乗ったまま発射されちゃうとか、亀、かわい過ぎ。酔っぱらいの王様もあれはあれでいそうだし。これ、ほんと、シリーズ化してほしいです」
あぁ、とわたしは思った。ほめられたことへのうれしさよりもあせりが先に来た。
それはダメだよ、片岡さん。わたしのが先輩たちのよりいいわけないじゃない。友だちだからひいきしたと思われるじゃない。それはちょっと、よくないじゃない。
「すごいな綾瀬って、ほんと、感心しました。綾瀬が本を出してく

れたら、わたし、買います。図書室に置いてくれたら、わたし、借ります」

と、そんなことを片岡さんが言ったその次がD組のわたしの番。

やりづらいなぁ、と思いつつ、わたしは予定どおり二日一部長の『ツバメ』を挙げた。家族の優しい気持ちがごく自然に伝わってきました、と言った。経験談ではあるのかもしれませんけど、ちゃんと小説としてもおもしろかったです。

そうね、と番場先生も言ってくれた。掃除は自分がやるから巣は壊さないでほしいと両親にお願いした主人公。主体的に動いたところがとてもよかったです。

一年生の感想発表が終わり、それからは二年生、三年生、と続いた。

二年A組の森内副部長は、やはり二日一部長の『ツバメ』を挙げたが、二年B組ガールズは三人ともその森内副部長の『シュート』を挙げた。

試合の肝心なところでフリースローを外してしまうバスケ部員の話だ。これも実際にバスケ部員である森内副部長の経験談だという。二本を二本とも決めていれば逆転で勝つことができたのに、森内先輩が二本とも外したためにチームは負けてしまったのだそうだ。

確かに悪くはなかった。が、12 わたしに言わせれば、『ツバメ』のほうが上だ。

『シュート』は、ただシュートを外しただけ。そういうこともあると示しただけ。その先がなかった。

でも『ツバメ』には先があった。主人公は、家に入ってきた蛾やクモなどの虫をなるべく外へ逃がそうとするようになるのだ。ツバメは守って虫は退治する、それもどうなのかと思って。なるべく、というところがよかった。そこに作者である二日一先輩の人間味が表れていた。

そして最後も最後。三年D組の二日一部長が何を挙げたかと言えば。まさかのこれ。

「ぼくも片岡さんと同じで、米山さんの『空を飛んだカメ』がおもしろかったです。すごく楽しめました。亀のかわいさもそうですけど、ハンスの人間としての弱さが印象に残りました。王様に戦争をやめてほしいのに、仕えてはいる。というか、仕えざるを得ない。例えば将来会社で働くようになったらそういうこともあるんだろうなと思いました。今度父に訊いてみようとも思いました。そんなふうに、亀のことだけじゃなく人間のことも書けてたので、とてもよかったです。ただ。ツバメが襲われてしまったのは、ちょっと残念でしたけど」

その最後の言葉でみんなが笑った。場が和んだ。

二日一くんの言うとおりだと思います、と番場先生は言った。亀のこと以外にハンスのことも描いたことで、13 物語に深みが出ました。川にぽちゃんと落ちて終わるラストも素敵でした。

参った。深み、だ。そんなことまったく考えていなかった。ハンスは、王様以外に人をもう一人出そうと思って出しただけ。ぽちゃんは、テレビのバラエティ番組で石によじ登れなかった亀が水に落ちたあの感じがよくてラストに書いただけ。

二日一部長は、たぶん、わたしと片岡さんの立場を考えて、『空を飛んだカメ』を挙げてくれた。わたしと同じ一年生の片岡さん一人がほめたままではよくないと思ったのだ。わたしたちがほかの先輩たちから睨まれたらよくない、と。

だから、部長の自分もほめることでそうならないようにした。ということなのだと思う。二日一部長。やはり優しい人なのだ。部長に適した人なのだ。番場先生もそれを感じていたから部長に任命したのかもしれない。

その意味でも、二日一部長がそう言ってくれたのはすごくうれしかった。ただ、全員の発表が終わったときに初めて、片岡さんがほめてくれたのはもっとうれしかったことに気づいた。

この場で三年生の部長が一年生の作品を評価するより、一年生が同じ一年生の作品を評価するほうがずっと大変なのだ。片岡さんは無理せずそれをやった。『空を飛んだカメ』の王様が平和にあきた

からよその国に戦争を仕掛けたのとはちがう。退屈だから二年生や三年生に戦争を仕掛けたわけではない。自分が思ったことを、ただ言ったのだ。

少なくともわたしにはそう聞こえた。14 聞いた瞬間は、あぁ、と思ってしまった。よくないとも思ってしまった。でも冷静に考えてみればそういうことだ。片岡さんはいつもの片岡さんとして動いた。ただそれだけ。

そして最後に番場先生が言った。

「みんな、小説を書いたのは初めてだと思うけど、よくがんばりました。二学期と三学期の第二作は十枚。次もがんばりましょう」

（中略）

二年B組の教室から出ると、いつものように、片岡さんと二人、一年生の教室に戻る。

階段を下りながら、片岡さんが言う。

「先生があんなこと言うから思いだしちゃった。来週はもうテスト期間かぁ」

「わたしは部活をやってないから特に変わらないけどね」

「わたしもそうだけど。でもやっぱ変わるじゃん。気は重いよ。勉強はしないのに」

「しなよ、勉強」

「いや、しないでしょ。一人で勉強なんてしないよ」

「いや、するでしょ。しなきゃ点取れないじゃない」

「おぉ。さすが綾瀬」

「さすがじゃないよ。普通だよ。テスト期間は勉強するのが普通。もしかして、片岡さん、しなくても点取れるタイプ？」

「そうであればよかったけどね。わたし、中間テスト、百四十番台」

一年生は四クラス。全部で百五十何人だ。

「綾瀬は？」と訊かれ、言いにくいなぁ、と思いつつ、言う。「十二番」

「すごっ。もう一回言うけど、さすが綾瀬。やっぱちがうわ」

「ちがわないよ。勉強したからだよ」

「っていう 15 それがすごい」階段の踊り場に立ち止まり、片岡さんは言う。「普通さ、そういうのは隠すじゃん。全然勉強してないとか言うのよ。なのに勉強したって言えちゃうのはすごい」

「勉強したってこと自体を言いたいわけじゃないよ。わたしは勉強しなくてもできちゃう人ではないってことを言いたいの」

「そんなこと別に言わなくていいよ。勉強したとかしないとか関係ない。十二番なんだから、ただ普通にすごい。小説だってすごかったじゃん。部長はああ言ってたけど、結局、綾瀬が一番。みんながいいって言ったのを書いた部長自身が、綾瀬のやつがいいって認めたんだから」

「部長と片岡さんがいいって言ってくれただけだよ」

「わたしはともかく、部長が認めたんだからすごいって。ほかにも何人かはいいと思ってたはずだよ。綾瀬が一年だからそうは言いづらかっただけ」そして片岡さんはこう続ける。（中略）

「あ、そういや、森内先輩って、中学からここなんだってね」

「ここって、船橋？」

「そう。こないだ本人から聞いた。お父さんの仕事の都合で仙台から引っ越してきたんだって。転校生だったの」

「じゃあ。わたしと同じだ。わたしは小二の終わりからだけど」

「わたしとも同じ」

「え、片岡さんはずっと船橋でしょ？　船橋で生まれたって言ってたよね？」

「生まれたのは船橋だけど、ずっといたわけじゃないよ。三年と四年のときは東京のあきる野市ってとこにいた。おばあちゃんに預けられてたの。（中略）」

（中略）

「そうなんだ」

「うん。わたしがいたら大変てことだったんでしょ。お父さんは仕事をやめたり何だりでいろいろあったし、お母さんも一人になるなら仕事をしなきゃいけないし」

「今は、一緒に住んでるんだよね？ 三人で」
「うん。たまにはケンカもするけどね。前にくらべれば、全然。またヤバくなったらわたしがグレるかも。いや、でもあれか、グレた女子が創作文クラブに入ってたらカッコ悪いか」
「16 何か、ごめんね」
「何が？」
「変なこと訊いちゃって」
「いいよ。隠す気もないし」
「ないの？」
「ないよ。だって、ほんとのことだし。自分からわざわざ言いはしないけど、隠すのもめんどくさいよ」
　わたしならまちがいなく隠す。隠そうとするまでもない。自然と隠してしまうだろう。
「あぁ」と片岡さんが言う。「何にしても、終わってよかった。まさか自分が小説を書くとはね。いや、書けてないか。書けてたのは綾瀬と部長ぐらいで」
「そんなことないよ。片岡さんのあれ、わたしはおもしろかったし」
「おぉ、と喜びたいとこだけど。綾瀬、それはひいきだよ。わたし、ひいきされたくない」
「ひいきじゃない。ほんとにおもしろいと思ったよ。最後、原稿用紙五枚じゃ事件は起きないよなっていうのとか、すごくおもしろいアイデアだと思った」
「ただの言い訳だよ。ちゃんと書けなかったことの言い訳。二学期三学期はあの倍書かなきゃいけないのかぁ。十枚じゃ、事件は起きちゃうよ」
「それを書いてよ。わたし読みたい」
「無理。思いつかないよ。先生がいないから言うけど。絶対死ぬ。余裕で死ぬね」
「ダメだよ、死んじゃ。片岡さん、それ言いすぎ。冗談でも死ぬとか言っちゃダメなの」
　片岡さんはちょっと驚いたような顔でわたしを見て、笑う。そして言う。
「でも、まあ、あれだ。ジャンケンで三回負けてよかったよ」
「何で？」
「決まってるじゃん。綾瀬と知り合えたから。すげ～。わたし、未来の作家と友だちになった。と思ったもん」
「作家になんてなれないよ」
「いや、なれるでしょ。たぶん、綾瀬はあれなんだよ。えーと、ほら、何だっけ。そう。原石」
「ダイヤの？」
「あ、自分で言った」
「って、言わせたんじゃない」
「だから磨けば光るんのよ。17 なら磨きなよ、綾瀬」
「何それ」
　と言いながらも、うれしかった。未来の作家とか原石とかがじゃなく、18、が。未来の作家と18になった、の、18、のほうが。
「ねぇ、片岡さん」とわたしは言う。
「もういい加減、泉でいいよ。みんなそう呼ぶし」
「あぁ」
　結城志麻を志麻と呼ぶのには二年かかった。片岡さんを泉と呼べるのなら、かかったのは二ヵ月半。
　そうできるのは、わたしが成長したからではない。相手が片岡さんだからだ。
「ねぇ、泉」とわたしは言い直す。
「ん？」
「一人じゃしないなら、ウチで一緒に勉強する？」

（小野寺史宜『みつばの泉ちゃん』ポプラ社より）

問1 ――1「片岡さんがまさにそれだというので、実際に訊いてみた」とありますが、

①「それ」の内容を本文から十七字でぬき出し、はじめとおわりの三字を答えなさい。

②「実際に訊いてみた」とは、何を訊いたのですか。解答らんにあうように、十五字以上二十字以内で答えなさい。

［　　］ということ。

問2 ――2「うらやましい。かどうか、よくわからない」とありますが、この時の綾瀬の考えとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 追いこまれてから力を発揮する泉のような生き方をうらやましく思っているが、周りに迷惑をかけることを考えると、自分にはとても無理だとあきらめている。

イ やるべきことが終わっていなくても気にしない泉をうらやみながらも、自分は同じようにはできないので、泉のことは自分とはちがう性格の人間としてとらえている。

ウ ささいなことは気にせずに過ごしている泉のようになりたいと思っているが、泉が楽しそうには見えないので、彼女にも人に言えない苦労があるのだろうと同情している。

エ やるべきことをギリギリまで放っておく泉のように生きられたら楽だろうとあこがれる反面、自分の方がうまく生きていけるという実感もあるので、泉を少しばかにしている。

問3 ――3「わかるわぁ」とありますが、綾瀬は亀のどのようなところに共感したのですか。適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の力でとりあえずがんばってはみるが、無理だとわかったらすぐにあきらめるところ。

イ 自分の持っている力を最大限使って努力をしてみるが、結局は上手くいかずにあきらめるところ。

ウ これまで乗り越えられなかったことにくり返し挑戦して、必死で目標を達成しようとするところ。

エ 自分の力では上手くいかないとすぐに気づき、新たな目標に向かって前向きに進んでいくところ。

オ 失敗したその場にはいたくないので、万が一にも失敗した場合はすぐにそこから移動するところ。

問4 ――4「次いで、こう思う」とありますが、綾瀬がここで思ったことの内容を二十字以上三十字以内で答えなさい。

問5 ――5「それが創作っていうこと」とありますが、番場先生が考える「創作」の説明として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現実をそのまま書いてもいい。

イ 現実と全部同じことを書かなくていい。

ウ 書くことを決めるのは早ければ早いほどいい。

エ いろいろな話のパターンを考えて比べるといい。

問6 ――6「もうずっとそんな感じだ」とありますが、綾瀬はこれまでの自分の行動の特徴をどのように考えていますか。四十字以上五十字以内で答えなさい。

問7 ――7「小説としてはつまらないんじゃないかな」と綾瀬が思った理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ストーリー展開が、すでに存在するようなありきたりなものだったから。
イ 自分が本当はこうしたかったという願望を、書くだけのものだったから。
ウ ありきたりな現実をそのまま書こうとした、工夫のないものだったから。
エ 番場先生に言われたままの、オリジナルではないストーリー展開だったから。

問8 [8]にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 平和を求める　　イ 戦争にあきる
ウ ワインにあきる　　エ パーティーをやめる

問9 ――9「お母さんに怒られて」とありますが、綾瀬が母親から注意を受ける描写のくり返しにはどのような意味があると考えられますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 綾瀬が集中しているにもかかわらず、何度も注意する母親の姿を描くことで、ふだんから綾瀬に対して厳しく接している母親の態度を強調している。
イ 親に反抗的な態度をとったことがなかった綾瀬が、自分の本心に気づいてとまどう姿を描くことで、大人へと成長していく綾瀬の変化を強調している。
ウ 小説を提出しなければいけない日が近づく中で、食事や入浴を忘れてしまうほど集中する綾瀬の姿を描くことで、綾瀬のあせる気持ちを表現している。
エ 食事や入浴よりも小説を書くことを優先する綾瀬の姿を描くことで、小説を書く楽しさを見出して、集中して取り組んでいる綾瀬の様子を表現している。

問10 ――10「自分の以外で十三人分」の「の」と同じ使われ方をしている「の」を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 机の上に花瓶を運ぶ。
イ 母の幼い頃の話です。
ウ 学校の帰りに待ち合わせる。
エ ここにあるノートは私のです。

問11 ――11「その片岡さんが何を書いたかと言えば」とありますが、綾瀬は泉（＝片岡さん）の小説のどのような点を評価していますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 探偵が事件を解決せずにあいまいな結末にすることで、読者の興味をひくという点。
イ 探偵が登場するが、何も起こらずにあたりまえの日常生活を描いているだけだという点。
ウ 『トム・ソーヤーの冒険』をアレンジして、作品に新たな解釈（かいしゃく）を生み出しているという点。
エ 探偵小説であるにもかかわらず、主人公の探偵がまちがった推理をする展開があるという点。

問12 □a～dに次のア～エをあてはめ、記号で答えなさい。（同じ記号は一度しか使えません。）

ア まずは　イ さすがに　ウ 確かに　エ せっかく

問13 ――12「わたしに言わせれば、『ツバメ』のほうが上だ」と綾瀬が思った理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 『シュート』は経験をそのまま書いただけだが、『ツバメ』は動物愛護という二日一先輩の信念を表しているから。
イ どちらの作品も経験談から創作しているからこそ、『ツバメ』からは二日一先輩のすぐれた人がらが感じられるから。
ウ 経験談を題材にしている点は二つの作品に共通しているが、『ツバメ』はそれにとどまらず後日談を加えているから。
エ バスケ部というせまい世界を題材にした『シュート』とちがい、『ツバメ』は多くの人にその先を感じさせる作品だったから。

問14 ――13「物語に深みが出ました」とありますが、二日一部長の発言の中から、「深み」にあたる部分を十二字でぬき出し、はじめとおわりの三字を答えなさい。

問15 ――14「聞いた瞬間は、あぁ、と思ってしまった」について、中学生が以下のように話し合いました。会話を読み、（　）1～3にあてはまる言葉として最も適当なものを、それぞれ後のア～エから選び、記号で答えなさい。

花子　「綾瀬には最初は（　1　）気持ちがあったね。でも、ほめられたうれしさもあったんだ」

秋子　「同じほめられたうれしさでも、二日一部長にほめられた時のうれしさとは、ちがったみたいだね」

夏子　「二日一部長にほめられて綾瀬がうれしかったのは、部長が（　2　）からだよね。でも、泉にほめられてうれしかったのは、泉が（　3　）からだね」

花子　「本当に二日一部長は、綾瀬が思うような理由で綾瀬の作品をほめたのかなぁ」

夏子　「そういう風に登場人物の心情を話し合うのが、みんなで物語を読むことの面白さだね。秋子さんはどう思う？」

1
ア　泉が二年生三年生に戦争を仕掛けたわけではないのに、先生に誤解されてしかられたら困るという
イ　泉が自分の作品を推したが、自分は泉の作品を推すつもりはないので、泉を傷つけることを心配する
ウ　泉が綾瀬の作品をほめると、友だちだからひいきしたと他の部員に思われるのでよくないと、あせる
エ　同じ学年だから自分が泉にほめられただけであり、そんな理由で選ばれなかった先輩たちに申し訳ないという

2
ア　未熟な作品なのに、良い点を見つけて評価してくれた
イ　綾瀬と泉が先輩に睨まれないように気を使ってくれた
ウ　一年生をはげまそうとして綾瀬の作品を選んでくれた
エ　ほめるところはほめた上できちんと批判もしてくれた

3
ア　綾瀬に親愛の情を示そうとしてくれたことがわかった
イ　部長と一緒になって綾瀬の作品の良さを理解していた
ウ　自分が思ったことを、いつも通り素直に言っただけだった
エ　先輩に綾瀬が負けないように、最大限の努力をしてくれた

問16 ――15「それ」の内容を二十字以上三十字以内で答えなさい。

問17 ――16「何か、ごめんね」とありますが、ここで綾瀬が謝った理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　泉からの返答が思っていたものと大きくちがっていたので反応に困り、何とかこの場をやり過ごそうと思ったから。
イ　泉が秘密にしていた小学生時代の家族の問題を、興味本位で聞いてしまったことに気づいて、申し訳ないと感じたから。
ウ　泉のようになりたいとあこがれていたが、おさない頃に苦労したことを知り、自分の悩みが小さなものだと思ったから。
エ　泉の出身について気軽に聞いてしまったが、複雑な家庭の事情を告げられて、嫌なことを話させてしまったと感じたから。

問18 ――17「なら磨きなよ」とありますが、ここでいう「磨く」とは何をすることですか。解答らんにあうように、十字以上十五字以内で答えなさい。

［　　］ということ。

問19 18にあてはまる言葉を本文から一語でぬき出して答えなさい。

問20 本文の表現の特徴として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 綾瀬が心の中で思っていることを、短い文を連続して用いることでテンポよく表現している。

イ 会話文以外にも綾瀬の気持ちが書かれているので、読者が気持ちを読み取りやすくなっている。

ウ クラブの後で綾瀬と泉が会話をする場面では、二人の関係が深まっていくようすが描かれている。

エ 現実に存在する書名や地名をふんだんに使うことで、綾瀬の創作がファンタジーであることを強調している。

問題は以上です。